

笛吹市探訪

旱魃（かんばつ）と祈り — 蕎麦塚のおたんぞうさん —



成田堰（なりだせぎ）

シリーズ第66回

笛吹市は、扇状地の肥沃な土壌と灌がい用水の普及を背景に桃、ぶどうの生産日本一の果樹地帯となつていきます。しかし、かつて市内には水不足、日照りに悩まされた地域もありました。

御坂町金川原区一帯は金川の氾濫がもたらした石や砂が厚く堆積し、「月夜でも焼ける」といわれ、農業用水の不足に悩まされてきました。また、江戸時代には金川から水を引いた成田堰（なりだせぎ）、

夏目堰（なつめせぎ）などが整備されましたがこれらの水には厳格な水利権が設定され、勝手な使用は許されませんでした。各地区に伝わる古文書には水争いに関する訴訟文書も数多く残っています。

御坂町蕎麦塚区には、「おたんぞうさん」とよばれる雨乞いのお地蔵様があります。

慶長（けいちょう）2（1597）年頃、

御坂町下野原区の清泉庵（せいせんあん）の故心禅師に胆蔵（たんぞう）という弟子がいました。

胆蔵は毎日、蕎麦塚区と二階区の境にあつた池での水汲みが日課となつていました。ある日

胆蔵が池に落ちた夢をみた清泉庵に滞在していた弾誓上人（だんせいしようにん）に話したところ、上人は胆蔵の身代わりとしてお地蔵様をつくり、胆蔵地蔵と名づけ

て池に沈めました。その後、この池は胆蔵池と呼ばれるようになりました。このお地蔵様は後の堰（せき）の工事の際に見えられ、水にまつわるお地蔵様であるとして、いつからか雨乞い地蔵として信仰されるようになりました。

今では農業の形態が変化してあ

まりみられなくなりましたが、かつては6月の田植えの時期になると村人はこのお地蔵様を縄で巻き、水をかけて雨乞いをしたといひます。それでも雨が降らない場合はお地蔵様を溜池（ためいけ）に入れて引き回したそうです。すると、不思議と雨が降ったといわれています。



おたんぞうさん